



核戦争を防止する 石川医師の会会報

第 85 号

2014.11.13

核戦争を防止する

石川医師の会

TEL 076-222-5373

FAX 076-231-5156

NPT 再検討会議 来春、ニューヨーク国連本部で開催 あなたも、国際要請行動に参加しませんか？

5年に一度、ニューヨーク国連本部で開催される核不拡散条約（NPT）再検討会議がいよいよ来春に迫ってきました。

石川県では、2015年国連に要請団を送る石川県実行委員会を結成し、石川県原爆被災者友の会や原水爆禁止石川県協議会、石川県生活協同組合連合会など様々な団体の代表が、ニューヨークに向かいます。

2010年に行われたNPT再検討会議国際要請行動には、石川反核医師の会からも、江守道子副代表世話人、平田米里会員、浦崎裕之会員ら4人が参加。その年の総会記念企画（第1回 Nuclear Abolition Day）では、各国要請団との合同パレードの様子、折り鶴を配りながら核廃絶署名の呼び掛けを行う様子など、国際行動の盛り上がりをご紹介いただきました。

来年のNPT再検討会議は4月27日から5月22日まで、ニューヨ



ークの国連本部で開催されます。このうち、石川県の代表団は4月24日～4月29日前後の予定でニューヨーク国際要請行動に参加します。来年も是非、私たちの会から代表を送り、石川県における核兵器廃絶運動を大きく前進させましょう！参加に興味のある方は石川医師の会事務局までご連絡ください。

◆ 核不拡散条約（NPT）とは

核兵器保有国が増えるのを防ぐ目的でつくられ、1970年に発効した条約です。一方的に脱退を表明している北朝鮮も含めると、現在の国連加盟国の中でインド、パキスタン、イスラエルの3か国を除く190か国が加盟しています。主な内容は、1967年1月時点で核兵器を保有していたアメリカ、ロ



2010年NPT再検討会議における石川県代表団の国際要請行動の様子（左上は江守副代表世話人）

シア、イギリス、フランス、中国の 5 か国に核兵器保有を認め、それ以外の国の保有を禁止しています。また、核保有国には、核兵器を減らすための交渉を誠実に行うことを求め、非核保有国には核兵器の製造、取得を禁じています。

◆ 核不拡散条約（NPT）再検討会議



2010年NPT再検討会議の様子

核兵器の軍縮や拡散の状況を定期的に検討するため、5年ごとに核不拡散条約（NPT）の再検討会議が開かれています。

2000年の再検討会議では、核保有国は核軍縮に対して努力不足との声が高まり、「核

兵器の全面廃絶に対する核兵器保有国の明確な約束」を盛り込んだ合意文書が採択されました。しかし、2005年の再検討会議は、核保有国と非核保有国の意見が対立し、成果を得ることなく閉幕しました。

2010年の再検討会議は前年にアメリカのオバマ大統領が登場し、「核兵器のない世界」への機運が高まる中で開催され、「核兵器のいかなる使用も人道上、破滅的な結果をもたらすことを深く憂慮する」と核兵器の非人道性が明記された核軍縮に向けた64項目の行動計画を柱とする最終文書が採択されました。

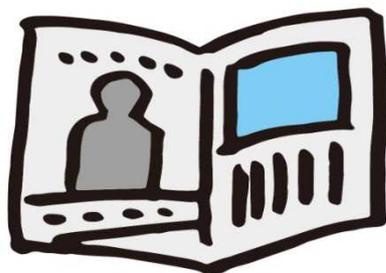
（参考：長崎市ホームページ）

<http://www.city.nagasaki.lg.jp/peace/japanese/appeal/terms/npt2013.html>

NPT 再検討会議国際要請行動に参加される当会会員には、渡航費の一部を補助します。参加を希望する方は石川医師の会事務局にご連絡ください。

電話 076-222-5373

核廃絶をめぐる国際情勢



◆ 国連、9月26日を「核兵器の全面的廃絶のための国際デー」に制定

2013年9月26日に開催された「核軍縮に関する

国連ハイレベル会合」の開催を受け、同年秋の国連総会で、毎年9月26日を国連「核兵器の全面的廃絶のための国際デー」（International Day for Total Elimination of Nuclear Weapons）に制定しました。核兵器のない世界という共通目標の実現に向け、核兵器人類に及ぼす脅威やその廃絶の必要性に関する世論喚起や教育を強化するための日とされています。

核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）は、この日を核廃絶デー（Nuclear Abolition Day）として、各国での行動を呼びかけ、日本でも様々な催

しが行われました（石川では、今年も例年通り 6 月に Nuclear Abolition Day を開催しました）。

◆ 国連委、核兵器の不使用訴える声明を発表

昨年引き続き、日本も賛同

10月20日、軍縮問題を討議する国連総会第1委員会、核兵器の非人道性と不使用を訴える共同声明が発表されました。

この声明はニュージーランドが主導して作成。「人類の存続のためには、いかなる状況下でも核兵器が使われないことが利益となる」とし、核兵器が再び使われないよう保証する唯一の方法として「核兵器の全廃」を求めました。

共同声明は今回で5度目となりますが、賛同国数は国連加盟国の約8割にあたる155カ国（オプザーバー国家のバチカン、パレスチナなどを含む）と過去最多となりました。日本も昨年に続いて賛同しています。昨年10月に発表された前回の声明では125カ国が賛同していました。なお、米国など核保有国は今回も加わっていません。声明には拘束力はありませんが、核保有国に一定の圧力になると期待されます。（参考：2014年10月21日付日経新聞）

◆ 第3回「核兵器の非人道性に関する国際会議」

に米政府、初参加予定

米務省は11月7日、ウィーンで12月に開かれる第3回「核兵器の非人道性に関する国際会議」に参加すると発表しました。米政府は、国連加盟国の4分の3が参加するようになった同会議を無視できないとして、参加を決定。来年4～5月の核拡散防止条約（NPT）再検討会議に向けて、核保有国としての核軍縮への取り組みをアピールし、「核兵器なき世界」をめざすオバマ政権の決意が揺らいでいないことを示す必要があると判断したとされています。

過去2回の会議では、NPT上の核保有5カ国はいずれも欠席しており、残る英国、フランス、

中国、ロシアが今回参加するかどうか注目されます。

「核兵器の非人道性に関する国際会議」は、2013年3月にオスロで初めて開催されました（通称「オスロ会議」）。オスロ会議には、127カ国の代表に加え、国連機関、国際赤十字運動、市民社会代表、その他の利害関係者が参加しました。アイダ外相は会議を総括して、「（会議に）これだけの幅広い参加を得たということは、核兵器の影響に関する地球規模の懸念とともに、世界中のすべての人々にとって最重要課題であるという認識が広がったことを反映した結果であると考える」と述べました。

2014年2月13日～14日、メキシコ西部ナヤリット州のヌエボバジャルタで開催された第2回会議（通称、ナヤリット会議）では、「とりわけ、公衆衛生、人道支援、経済・開発・環境問題、気候変動、食料安全保障、リスクマネジメントといった領域を含め、21世紀の観点と関心から、偶発的か意図的にかかわらず、いかなる核爆発ももたらす地球規模かつ長期的な結末」について検討しました。

ナヤリット会議には、146カ国の代表、国連、赤十字国際委員会、国際赤十字・赤新月社運動、市民社会組織の代表が参加しました。

ナヤリット会議の議長は、オーストリアが第3回「核兵器の非人道性に関する国際会議」を主催すると申し出たことは、「オスロ及びナヤリットのフォローアップとして、現在の気運を高め、それらの結論をより確固たるものとし、前進させるものとして、参加者からは強い支持が示された」と指摘したうえで、「多くの参加者が述べたように、ナヤリット会議は、核兵器国及びNPT未加盟国に対し、オーストリアでの第三回会議への参加を繰り返し求めていく」と語りました。

さらに議長は次のように語りました。「そうしていく上で、私たちは、過去において諸兵器がまず非合法化され、そして廃棄されてきたことを考慮しなければならない。これこそが、核兵器のな

い世界を達成する道だと信じています。また、このことは、核不拡散条約（NPT）やジュネーブ条約共通第1条でも示されているように、国際法に基づく私たちの義務と合致するものであると考えています」

「核兵器の人的影響に関する広範かつ包括的な議論は、法的拘束力のある条約を結ぶことを通じて、新たな国際基準及び規範を実現するとの、政府及び市民社会の誓約につながっていかねばならない」

「私たちは、ナヤリット会議はこの目的に資する外交プロセスを開始する時期が来たことを示したと考えます。またこのプロセスには、特定の時

間枠、最も適切な議論の場の明示、明確かつ実質的な枠組みが含まれるとともに、核兵器の人的影響が軍縮努力の本質に据えられたものでなければならぬと考えています。」

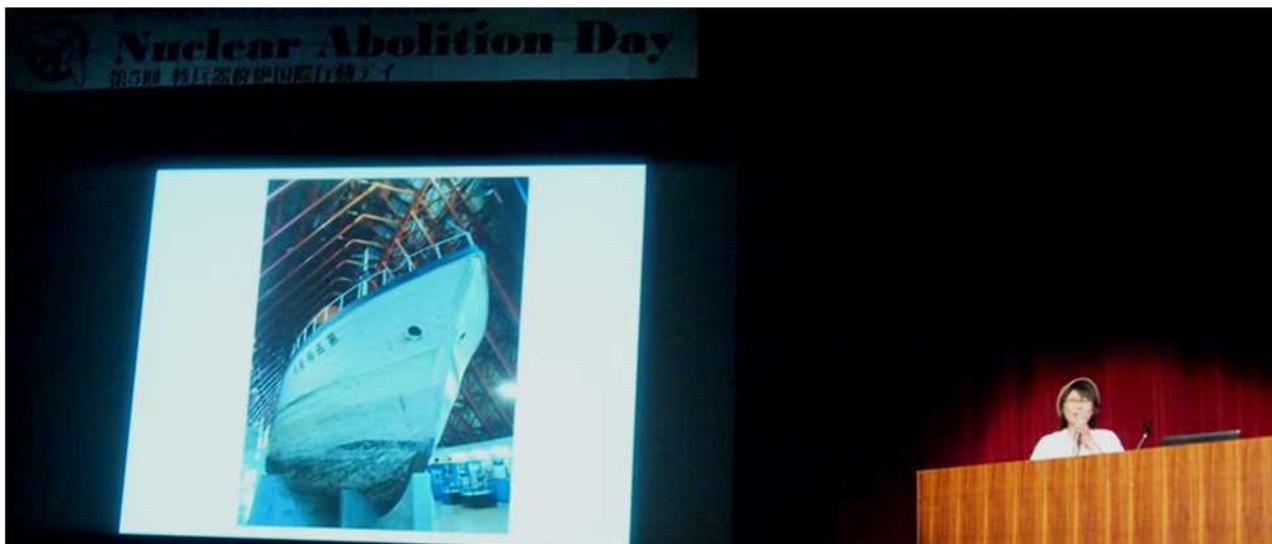
「今こそ行動に移るべき時です。広島、長崎への核攻撃から70年目を迎える来年こそが、私たちが（核廃絶という）目標に向かうにふさわしい里程標である。ナヤリット会議は『ポイント・オブ・ノー・リターン（もはや後戻りできない地点）』なのです」と議長は総括しました。

（引用・参考：IPS Japan「オーストリア議会、核軍縮に向けた政府の取り組みを後押し」<http://www.ips-japan.net/>）

第27回石川反核医師
の会 総会記念企画

第5回 Nuclear Abolition Day に270人参加

「ビキニ水爆実験による被災から60年。核被害の実相を知り、語り継ぐ」をテーマに開催



2010年NPT再検討会議直後、ICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）の呼びかけで始まったNuclear Abolition Dayは石川県でも毎年6月、石川医師の会総会記念企画として開催しており、今年で5回目を迎えました。今回は「ビキニ水爆実験による被災から60年。核被害の実相を知り、語り継ぐ」をテーマに掲げ、6月15日、石川県女性センターホールにて開催しました。

ドキュメンタリー映画「放射線を浴びたX年後」の上映と、東京都立第五福竜丸記念館学芸員の市田真理さんを講師とした講演会の2本立てで行い、石川や富山などから約270人が会場に詰め掛けました。

また、上映会の前には、毎年恒例の「白衣の街頭キャンペーン」を金沢駅鼓門下で行い、「核兵器・原発NO!」の風船を配るなどして、市民に

核兵器廃絶、脱原発を訴えたほか、石川反核医師の会第 27 回総会も石川県女性センター会議室で開催し、2013 年度の活動報告、2014 年度の活動計画等を討議しました（総会議案書は前号に同封）。

第 1 部 ドキュメンタリー映画「放射線を浴びた～X 年後」の上映

1954 年、アメリカが行ったビキニ水爆実験。当時、多くの日本の漁船が同じ海で操業していたにもかかわらず、第五福龍丸以外の被ばくは、人々の記憶、そして歴史からもなぜか消し去られていきました。その重大事件に光をあてたのは、高知県の港町で地道な調査を続けた教師や高校生たちでした。その足跡を丹念にたどったローカルテレビ局・南海放送（愛媛県松山市）の 8 年にわたる長期取材の記録が、ドキュメンタリー映画「放射線を浴びた～X 年後」です。

これまであまり知られることのなかった「もうひとつのビキニ事件」。その実態を初めて知った上映会参加者からは、「福島原発事故と同じくらいの衝撃だった」、「少し考えれば第五福龍丸だけではないと思いつくの自身の想像力のなさに啞然。極秘事項が後世に残し、検証できるアメリカの民主主義と日本を比べるとまたまた啞然！」という声など、多数の感想が寄せられました。



～ビキニ被災船員の核被害調査・研究活動に募金集まる～

ビキニ事件の真相究明を続けている山下正寿さん（映画「X 年後」にも登場）が事務局長されている太平洋核被災支援センターでは、ビキニ事件被災船員の核被害調査・研究活動を行っています。活動支援のために、上映会参加者に募金の呼びかけをしたところ 67,420 円集まり、太平洋核被災支援センターに送金しました。

山下さんからは、「厚生労働省交渉の交通費として活用させていただきました。ありがとうございました



金沢駅鼓門下で行われた白衣の街頭キャンペーン終了後、参加者で記念撮影。

ました」とのお礼のメールをいただきました。

～厚労省がビキニ事件の文書開示～

山下さんらは、ビキニ周辺海域で操業していた漁船の乗組員や魚の放射能検査などに関する当時の文書開示を厚生労働省に求めており、今年 9 月 19 日、ようやく開示されました。

厚労省によると、これまでも検査結果などに関する文書で内容が明らかになっているものはあるが、同省がまとまった形で開示するのは初めてのこと。職員が公文書の保管倉庫を探し、段ボールに入っているのを見つけました。第五福龍丸の乗組員が被ばくしたビキニ事件では、いまだに被ばく状況などの全容は明らかになっていません。

～厚労省、追加で情報開示～

さらに厚生労働省は 10 月 30 日までに、一部の被ばく船に関する文書を追加で開示しました。

厚労省によると、漁船「第十三光栄丸」や、貨物船「神通川丸」の乗組員の血液や尿を調べた精密検査結果、医師の所見などが含まれ、計約 130 ページ。外務省は昨年、同じ文書の大部分を黒塗りにして開示しましたが、今回は個人名などを除き、ほぼ黒塗り部分はなかったとのこと。



太平洋核被災支援センターの山下正寿さん

開示請求をしていた山下さんは「被ばくが高線

量だったことの裏付けになる資料だ」と話されました。(参考：2014年10月30日付琉球新報。写真は「マイECO～持続可能な社会のための情報誌」30号、山下正寿さんのインタビュー記事より)

～「X年後」の続編放送も～

なお、山下さんらが行う核被害調査・研究活動は今年8月6日、NHKスペシャル「水爆実験 60年目の真実」として放映されました。放映内容について詳しくはNHKスペシャルのホームページへ <http://www.nhk.or.jp/special/detail/2014/0806/>

また、映画「放射線を浴びた～X年後」の続編「日本に降り注いだ雨は今」が8月10日に、さらなる続編「棄てられた被ばく者」が11月2日に、NNNドキュメントでテレビ放映されました。

第2部市田真理さんによる講演「第五福竜丸は航海中」

第五福竜丸元乗組員の太石又七さんと一緒に講演活動をされることも多い市田真理さん(都立第五福竜丸展示館学芸員)は、ビキニ水爆実験被害の実相を伝え、権力と人々の「忘却」と闘い続ける太石さんの話を語り継いでいく「語り継ぎ部」でありたいと語り、聴衆の共感を呼びました。

被爆者の高齢化により、語り部が少なくなっているなか、二度と悲劇を繰り返さぬために、被爆の実相をいかに語り継いでいくかが大きな課題となっています。被爆2世の参加者からは、「市田さんの話を聴いて、2世として語り継いでいく勇気と覚悟ができました」という感想も寄せられました。

以下に、反響が大きかった市田真理さんの講演要旨を紹介します。

～廃船処分されていた第五福竜丸～

一昨年で通算来館者数が500万人を超えた、第五福竜丸展示館。もともと福竜丸は木造船でしたが、後に甲板から上が鉄製に改造され、船名も「はやぶさ丸」に変わっていました。

都港湾労働組合のニュースで「廃船処分になって捨てられている」と知らされ、保存運動が始ま

ります。水爆実験の生き証人なので板切れ1枚でも残したいとの思いから、船が沈みかけた際にはバケツで排水したり、台風の晩は徹夜で見守った人たちがいました。

～60年前のビキニ水爆実験～

今から60年前の話です。米国がビキニ環礁で行った核実験「ブラボー」の威力は広島型原爆の1,000倍。誰に向かって使うつもりだったのでしょ

うか。第五福竜丸の乗組員たちは、実は、キノコ雲を見ていません。船員が作業を終え船室で休んでいた時に突然、西の空が明るくなったのです。「夕焼けのような光がひろがり、光が止まり、黄色っぽくなり、そして闇が戻った」と太石又七さんは語りました。「縄上げろ」の指示のもと作業を遂行し、急ぎ日本に針路をとりました。

～死の灰を浴びた船員～

天候が乱れ、雨が降り出したなかで太石さんが見たのは、船に覆いかぶさってくる大きな雲の塊でした。風上にいるのに何故か船に向かって押し寄せてきたそうです。広島では黒い雨が降ったのですが、この時は白い灰のようなものが混じっていたのです。それは体に当たるとチクチクと痛いもので、気がつくと甲板に足跡がつくくらい降り積ったそうです。

その日のうちに吐き気、頭痛、食欲減退が起き、数日経つと白い雨に当たったところが火傷の跡のようになり、髪の毛がまとめて抜け落ちたのです。急性放射能症でした。

福竜丸は小型船で、7ノットしか出ないため、焼津港までは2週間かかりました。つまりその間、放射性降下物とともにあったのです。

当時はまだ戦後9年、広島や長崎のことはまだ情報規制がさ

られていて、国民は何も知らされていませんでした。



講師の市田真理さん

ただ医師は「ピカを見たのでは？」と語ったそうです。これが3月16日の世紀のスcoop「邦人漁夫、原爆実験に遭遇」につながるのです。漁夫は今の単位でいうと2,000~3,000 mmSv、つまり半致死量に当たるものを浴びたのです。

～全国では850隻を超える船が被害に～

当時の石川の地元紙を調べると、「昨日金沢に被爆魚二尾入荷」「金沢大学に持ち込み…」「汚染魚は廃棄魚雷のような姿で…」「野田山に埋めた」とあります。決して焼津だけの事件ではなかったのです。築地ではセリの最中に連絡が入り、セリ止めとなって、全て土中処分されました。全国では850隻を超える船が被害に遭って全てを廃棄処分にするなど、悔しい思いをしたことを忘れてはいけないと思います。



～ビキニ事件は原水爆禁止運動の原点～

「ブラボー」は34,000mまで原爆雲をせり上げ、死の灰の粒の比較的大きなものは海面まで落ちてきましたが、小さな粒子はジェット気流に乗って地球を回り、雨となって降りました。こんなことは冗談ではないという思いが、原水爆禁止運動の原点となっていくわけです。

このような不幸があってもなお、米ソは原水爆実験を繰り返し、日本政府は米国の要請を受け、

12月末をもって全国18の港で行われていた検査を打ち切ってしまいました。その理由は「放射能は直ちに人体に影響が出るものではない」というとんでもないものでした。よって翌年から汚染魚ゼロということになっています。全くのデタラメです。

消費者としてできることは、こういった経緯を忘れず、せめて検査の継続を要請し、その結果を公表させるよう言い続けなくてはなりません。そうしないとビキニ事件の歴史から学んだことにならないと思います。

～核実験場になったマーシャルの住民たち～

核実験場になったマーシャルのことを述べます。写真には深い青色になっている海が見えます。何故ここが青くなっているかといえば、「ブラボー」によってえぐられているからなのです。

5回目の「ヤンキー」(ふざけた名前!)では風向きの関係で日本に直接、死の灰が降り注ぎました。グローバルフォールアウトだどご理解いただけるとと思います。

同じ160kmの位置にロンゲラップ環礁がありますが、その住民たちは避難させられずに「日本に降る雪」として死の灰をかぶりました。何も知らされず人体実験させられたのです。実験後50日経って米軍に収容され、3年後に島に戻った住民は奇怪な恐ろしい風景を見、健康障害に苦しみました。そしてロンゲラップの女たちは異常な自然や異常出産の実態を国際世論に訴えました。「ジェリー・フィッシュ・ベイビー」(クラゲのような赤ん坊)という言葉ほど悲しいことはありません。

そして放射能汚染レベルが5段階で4~3というデータを米軍が82年に突然出した時、ロンゲラップ島の人たちは、子どもたちの未来のために、放射能汚染された島を捨てるという苦渋の決断を下したのです。

～政治決着で“この事件は終わった、～

その後、政治決着で200万ドルのお金が日本政府に支払われました。これは損害賠償ではありません。「公的な責任は伴わない」という一言が入っ

ているからです。

日本政府に全額丸投げで支払い、業界団体などに配分されただけであって、一軒一軒に補償したわけではありません。ところが第五福竜丸の船員には一人当たり 200 万円の見舞金が支払われました。そうすると船員は一斉に退院させられて、「被ばく者はいない」「この事件は終わった」となったのです。そして故郷に帰ると、「あんたらうまいことやったね」と言われ、それで大石さんも二度と海の男に戻れなくなったのです。

～私は「語り継ぎ部」、でありたい～

大石さんは東日本大震災の二週間前に「私たちは危険と隣り合わせにいます。気づくなら今ですよ」と予言のように語り、「自分が怒り続けなければ、黙って死んでいった人たちに申し訳ない」と言いました。

大石さんは病から立ち直られ、現在、講演活動を再開しつつあるのですが、私は失礼ながらご本人の前で「この人には時間が無いのです」と申し上げています。かけがえのない語り部だからです。そして私はその「語り継ぎ部」でありたいと考えているのです。ぜひ皆さんもそうあっていただきたいです。

この船はゴミの中から救い出され、今は建物の中に保存され、二度と船出することはありません。でも第五福竜丸は「核のない未来に向かって航海中」なのです。どうぞ皆さんもこの航海にご一緒しましょう！

(参考：非核・いしかわの会編集部書き起こし原稿)

※Nuclear Abolition Day で市田さんの話を聴か



書籍販売コーナーに並ぶ参加者ら

れた複数の方が第五福竜丸展示館を訪れてくださったという嬉しい報告が、市田さんから寄せ

られました。皆さんも訪れてみませんか？

＜東京都立第五福竜丸展示館＞

東京都江東区夢の島 2 丁目 1-1 夢の島公園内

TEL : 03-3521-8494 FAX : 03-3521-2900

ホームページ <http://d5f.org/>

◆ マーシャル諸島政府、核兵器保有国を相手国として I C J に提訴



マーシャル諸島共和国は、今年 4 月 24 日、中国、朝鮮民主主義人民共和国、フランス、インド、イスラエル、パキスタン、ロシア連邦、イギリス、アメリカ合衆国 9 か国の核兵器保有国を I C J (国際司法裁判所) に提訴しました。

提訴の主な内容は、次のとおりです。

- ① NPT 当事国が、核軍備競争の早期の停止および核軍縮に関する効果的な措置についての誠実な交渉を積極的に行わないことは、NPT 6 条及び国際慣習法上の義務に違反していること、NPT 非当事国が同様の交渉を行わないことは、国際慣習法上の義務に違反していることを確認すること。
- ② 相手国に、上記の義務に従うために必要なすべての措置を、1 年以内に講ずる命令を発出すること。そして、その措置の中には、「厳重かつ効果的な国際管理の下におけるあらゆる点での核軍縮に向けた誠実な交渉を遂行すること」が含まれている。

日本反核法律家協会は、7 月 23 日、核兵器の廃絶を求める日本の法律家団体として、このマーシャル諸島政府の提訴を歓迎し、連帯の意思を表明しました。

(参考：核兵器廃絶日本 NGO 連絡会)

<http://nuclearabolitionjpn.wordpress.com/>

◆ 金沢市教育委員会等、後援不承諾

今回の Nuclear Abolition Day には昨年に引き続き、石川県生活協同組合連合会、石川県原爆被

災者友の会、石川県保険医協会、石川県民主医療機関連合会、九条の会石川医療者の会、生活協同組合コープいしかわ、NPO法人「はだしのゲン」をひろめる会、非核の政府を求める石川の会から後援が得られたほか、野々市市教育委員会も新たに加わりました。

一方、輪島市、七尾市、能美市、金沢市、内灘町の教育委員会は、街頭キャンペーンで「脱原発」の風船を配布している、映画「X年後」のキャッチコピー「311 後の日本に投げかける」の表現に違和感がある等を理由に、残念ながら後援不承諾となりました（後援依頼先は、過去4回の Nuclear

Abolition Day 後援団体のほか、『はだしのゲン』を寄贈した6自治体の教育委員会）。

他県においても『はだしのゲン』閉架措置や反戦・平和を訴えるイベントへの会場提供拒否問題が見られるように、近年、政府方針に反する動きに対して自治体が過剰に反応し、萎縮する動きが見られます。しかしながら、私たちはこのような情勢だからこそ、「核廃絶」が圧倒的多数の声となるよう、これまで以上に核廃絶運動に確信をもって、市民、自治体、教育現場への働きかけを強めていきたいと思っています。

IPPNW 世界大会 8月にカザフスタンで開催される 石川医師の会からも原和人先生、横山加奈子先生が参加



全国反核医師の会（PANW）は、8月27日～8月29日にカザフスタンの首都、アスタナで開かれた第21回核戦争防止世界医師会の世界大会に、22名で参加しました。石川からは原和人・全国反核医師の会代表世話人と横山加奈子会員（城北病院

研修医）が参加。出発前には、横山先生より参加決意文が寄せられたほか、横山先生は現地滞在中にPANW発行現地ニュースに毎回寄稿され（全4報）、会場の盛り上がり、現地の様子、議論の要点などを臨場感たっぷりに報告されました。

◆ 横山加奈子先生から寄せられた参加決意文



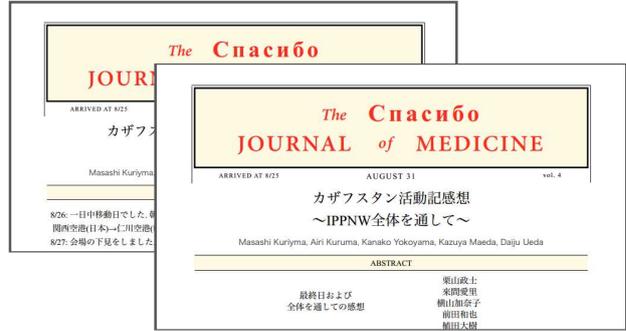
横山加奈子先生

今回初めて、IPPNW の総会に参加させていただくことになりました。医学生時代から憧れ続けていた IPPNW への参加がようやく実現しそうで、本当に嬉しく、そして病院を代表してたくさんのカンパもいただいて行くということで、引き締まる思いでいます。

医療者が核兵器に反対して、平和で健康な社会を築いていこうという呼びかけは、当たり前だと思っていますが、そのアピールをどう活動の中で活かせるか、常に模索中です。世界中の医師がどんな思いでどのように活動しているのか交流できるのも、とっても楽しみです。帰ってきたらしっかり報告させていただきます。

それでは行ってまいります！

城北病院 研修医 2 年目 横山加奈子



◆ 現地からの報告ニュース「The Спасибо JOURNAL of MEDICINE」に横山先生が寄稿

(以下、横山先生寄稿文を抜粋して掲載します)

カザフスタン活動記 第 1, 2 日目 (8 月 26, 27 日) ~準備編~

8/26: 一日中移動日でした。朝に日本を出発し、カザフスタンのアスタナに着いたのは夜でした。関西空港(日本)→仁川空港(韓国)→アルマティ(カザフスタン)→アスタナ(カザフスタン)
8/27: 会場の下見をしました。その後アスタナの観光にでかけました。

8/25~26 と、IPPNW の学生 and 若手医師の会議に出席してきました。世界中の 20 代のキラキラした前向きなディスカッションがそこかしこで溢れており、久々に企画を楽しめました。IPPNW が 1985 年にノーベル平和賞をもらった時は冷戦真っ只中であり、核戦争の危機が誰にも感じられ、組織の役割も意味もシンプルで明確でした。それが、今でももちろん核戦争の危機は続いているとしても、学生としてはなかなか今ある危機をシンプルに自分のものとして捉えられない、という問題意識があげられていました。核戦争、核兵器廃絶をうたうだけでは足りないヒバクの問題にも目を向け、それを自分たちの問題としてしっかり捉えようとしており、その姿勢に励まされました。学生ではなく若手医師として、この問題をどう捉えていけるか、あと 3 日の本大会でも考えていこうと思います。



カザフスタンの首都、アスタナ



fig.3: 学生若手医師会議にて

カザフスタン活動記第3日目(8月27日)
～IPPNW 初日～

- 9:00-10:00 Opening Ceremony
来賓の方々からの挨拶
- 10:30-12:10 Keynote Addresses
核廃絶に向けた総論的な内容
- 13:10-14:40 Plenary 1
核廃絶に向けた人道的なアプローチ
- 15:00-16:30 Japan Workshop
眞鍋先生、木村先生によるフクシマの放射能被害の話
- 19:00-22:00 Welcome Party
本日の労をねぎらいつつ、各国と交流

Opening Ceremony

オープニングセレモニーでは、カザフスタン IPPNW の代表、外務大臣、プーチン大統領(文章のみ)などなどより歓迎の挨拶をいただきました。最も印象に残ったのは、旧ソ連時代に何度も核実験が行われているセミパラチンスク近くの村で生まれ育った両腕のないカザフスタンの画家、Karipbek Kuyukov(カリプベク・クユコフ)さんのスピーチでした。彼は、医師はヒバクシャの心強い味方だ、と言っていまいした。すごく嬉しかったです。世界のヒバクシャがまだまだ苦しんでおられるのを改めて知るとともに、しっかり味方となるためにも、科学者として人間として、ともに歩んでいきたいと思いました。

今回の IPPNW 総会で、なかなか目新しい情報、考え方に出会えていません。そんな中、武田先生、眞鍋先生、木村先生の福島の現状を伝えるワークショップは際立っていたと思います。とっても勉

強になりました。帰ってからまた頑張ります。

カザフスタン活動記第4日目(8月28日)
～IPPNW2 日目～

- 9:00-10:30 Plenary2
様々な暴力についてのセッション
- 11:00-12:30 Workshop
平和を軸に友達を作るワークショップ
- 13:30-15:00 Plenary 3
セミパラチンスクの核被害のセッション
- 15:30-17:00 Plenary 4
核の及ぼす様々な影響に対するセッション
- 19:00-22:00 Gala Dinner
市長主催によるディナー

Plenary4

今回の全体会議のテーマは” The Impact of the Nuclear Chain on Health, and the Environment, and Security” でした。

月並みな報告になりますが、フランスに代表されるように、核の使用には軍用と「平和的」利用のダブルスタンダードがまだまだまかり通っているようです。核不拡散条約、NPT 再検討会議の枠外で、パキスタンやインドに日本やオーストラリア、アメリカなどが、濃縮ウランの技術やウラン自体の輸出入が行われており、そこまでしっかり制限する必要があるという指摘でした。

カザフスタンという土地も、1991年に核実験場の閉鎖を宣言しながらウランの採掘は続いているという矛盾をはらむ国です。今や核エネルギーは負の遺産そのものであるにもかかわらず、非核3原則を掲げる日本も、その技術を輸出している現実があります。核エネルギーの利用自体を制限しなければ意味がないことを痛感しました。IPPNW2 日目。ようやく面白くなってきました。



fig.2: みなさん勉強中

カザフスタン活動記
～IPPNW 全体を通して～



fig.3: 閉会式

いよいよ 21th IPPNW in カザフスタン最終日は Action、行動についての発表が多かったのですが、世界各国とてもユニークで楽しそうなイベントをたくさん報告していました。自転車ツアーで平和を訴える、いわゆる P チャリはもちろん、ケニアのキリマンジャロ登山プロジェクトなど。若者を中心に楽しく活動することで、Action に参加するハードルは確かに下がります。しかしやはりこんな活動に至る前に(もしくは同時に)、なぜなかなか核兵器をなくせないのか、ウラン採掘をやめられないのか、などの社会的背景をしっかりとつかんでおかないと、自己満足の Action に終わるようにも感じました。

そんな悶々とした気持ちもありましたが、全体を通して振り返ると、PANW の視野の広さ、先見性を感じたのが大きかったです。総会での人道的な戦略や、気候変動、それによる飢餓の話など、反核医師の会の講演などで聞いたものばかり。また、日本ではあまりなじみのない、「医師の社会的責任」

については、世界ではこんなにどうどうと謳われているのか、と驚きました。グローバルスタンダードを知るとまた、活力が湧いてきますね。今回は若手研修医もそろっており、ところどころでディスカッションできたこともとっても楽しかったです。もちろん世界中の人との交流も。じわじわした活動が続きますが、一步一步着実に前進していると感じ、また研修医としてもしっかりとがんばっていこうと思いました。

参加させていただき本当にありがとうございました。



fig.4: はだしのゲン贈呈

『ゲン』も、カザフスタンに旅立つ！

横山先生は、各国の参加者に向けて『Barefoot Gen』を英語で紹介。PANW ブースには『Barefoot Gen』と『Barefoot Gen・紙芝居』のCD-ROMも展示され、海外からの参加者や現地の大学に寄贈されました。

(文および写真は、「The Сп а с и б о JOURNAL of MEDICINE」及び PANW ホームページより転載)

▼詳しくは PANW 特設ページへ

全国反核医師の会 (PANW) のホームページには、IPPNW 世界大会 in カザフスタンの特設ページが作られており、大会プログラムのほか、PANW がコーディネートしたワークショップ “Health Effects of the Fukushima Disaster” の資料、展示ブースの様様や現地報告ニュース全 4 報のほか、写真や動画等も紹介されています。

http://no-nukes.doc-net.or.jp/activity/IPPNW/Cong/2014_21astana/astana_1.html



書籍案内

『広島のパカ』

『たみちゃん4歳の記憶、そして被爆者運動へ』

石川県原爆被災者友の会事務局長の西本多美子さんの被爆証言がブックレットになりました。

2013年4月に平和サークル・むぎわらぼうしが主催した「ヒロシマ原爆ひばくしゃのお話をきく会」。その模様を、むぎわらぼうしのメンバーが文字起こし、今年4月に簡易冊子として発行しました。大変好評につき半年も経たずに重版となり、第3刷となる今回は、印刷所による製本で、新装版として発行となりました。

西本さんが4歳のときの、微かに記憶に残る被爆体験、その後、多くの被爆者の証言を読みこんで語り継いできたこと、被爆者の指定医療機関を増やす取り組み、被爆者手帳取得や原爆症認定のために奔走されたことなど、西本さんの半生（被爆者運動の歴史）が語られています。本書は、西本さんの語り口調をそのまま残し、平易な言葉でわかりやすく書かれているのが特長です。編集には、石川反核医師の会事務局も協力しました。

なお、本書の売り上げの一部は、石川県原爆被災者友の会の2015年NPT再検討会議国際要請行動への派遣募金に充てられます。来年のNPT再検討会議要請行動には、石川県原爆被災者友の会の2世部会のメンバーの参加が決定しています。2世の皆さんは、核保有国アメリカで、被爆者の皆さんを補佐しながら、被爆の実相を伝える重要な役割を現地で果たされる予定です。

会員の皆様もぜひ、ご一読いただくとともに、普及にご協力をお願いいたします。

※ 売り上げの一部は石川県原爆被災者友の会の2015年NPT再検討会議派遣募金に充てられます。

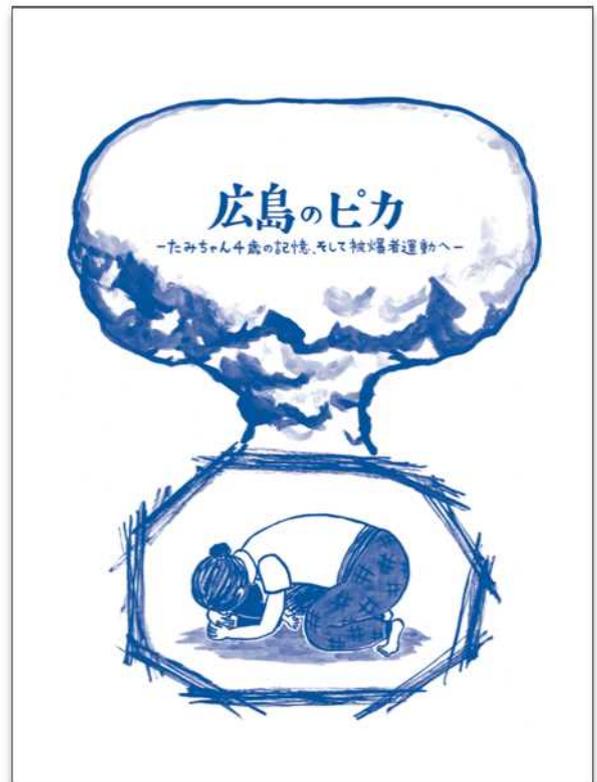
<注文先>

石川反核医師の会

電話 076-222-5373、FAX076-231-5156

◆西本多美子さんのプロフィール

広島市出身。石川県原爆被災者友の会事務局長。4歳のときに広島で被爆。自らの体験だけでなく、多くの被爆証言を受け継ぎながら、県内にとどまらず、国内外で講演、被爆証言を行うなど被爆の実相を伝える活動を続ける。核兵器の廃絶と原爆被災者への国家補償を求めて国に働きかける一方、県内被爆者の原爆症認定支援にも精力的に力を注ぐ。



A4判／46頁／頒価 500円

発行 平和サークルむぎわらぼうし

2014年10月19日、第3刷発行



会費納入と運動募金にご協力をお願いします



2013年度および2014年度会費の納入、さらには運動募金にご協力いただいた皆様、ありがとうございました。皆様からいただいた会費および運動募金は、今後の反核医師の会の活動資金として、有効に活用させていただきます。2013年度の活動実績と決算報告、2014年度の活動計画と予算については、会報第84号に添付した総会議案書をご覧ください。

◆NPT再検討会議国連要請団に、石川医師の会から代表派遣を！

来年のNPT再検討会議・国際要請行動には、当会からも再度代表を派遣したいと考えています。当会代表として参加してくださる方を募集し、渡航費の一部の補助を行うことを検討しています。

◆県内小中学校への『はだしのゲン』寄贈運動を継続！

また、当会では引き続き、石川県内の小中学校に『はだしのゲン』を寄贈する運動に取り組んでいます。2014年11月1日現在、6自治体58校に寄贈しました（寄贈先については会報前号に同封した資料をご覧ください）。運動募金にご協力いただきました皆様、ありがとうございました。また、今後も残り13自治体の小中学校への寄贈を予定しています。

「核のない21世紀を子どもたちへ」の実現のため、核兵器廃絶を求める世論と運動を一層広める活動の基盤となる財政を確保するため、会費の納入と活動募金にご協力をお願いします。

※同封した振込用紙には会員の先生ごとに未納分の会計年度を記載しています。既に2013年度分および2014年度分を納入いただいている方には振込用紙は同封していません。

■年会費 5,000円

会計年度 2013年度＝2013年4月～2014年3月

2014年度＝2014年4月～2015年3月

■振込方法 会報同封の「郵便払込票」をご利用ください。

■事務局

核戦争を防止する石川医師の会

〒920-0902 金沢市尾張町2-8-23 太陽生命金沢ビル8階

石川県保険医協会内

TEL 076-222-5373 / FAX 076-231-5156

核兵器全面禁止アピール署名 目標1000筆！

2010年のNPT再検討会議以来、毎年継続している「核兵器全面禁止アピール署名」。来年のNPT再検討会議には、医師の会分として1000筆を目標に、来年1月を締切の目途として署名の推進を行っています。現在の集約数は108筆です。

会員の皆様の協力をお願いします。

